

ル・ボン、タルド、ジンメルにみる流行理論の系譜  
——集合行動論の観点から——

中島 純一

Fashion Theory and Collective Behavior :  
the Genealogy of Le Bon, Tarde and Simmel

Nakajima Jun-ichi

**Abstract**

In sociological studies, fashion phenomena are classified into the head of collective behavior in the wide sense of the word. This paper examines how the contagion and the imitation theories, which form the backbone of modern fashion studies, find their places in the field of collective behavior studies.

This paper also demonstrates how the genealogy of fashion theories has been formed, by focusing on the three leading scholars in this field: Gustave Le Bon, Gabriel Tarde and George Simmel. Le Bon, the father of the notion of “crowd psychology,” applied the medical notion of “contagion” to sociological studies. His theories of “the masses” and “contagion” have long been authoritative in the succeeding researches in fashion. Tarde brought forward the notion of “the public” and the theory of “imitation.” His imitation theory differs from Le Bon’s in his assumption that “the imitation principle” continues to alter societies. In the center of his fashion studies lies another theory of “the trickle down effect,” which is still widely quoted in the researches concerned. Simmel developed the theories of Le Bon and Tarde into his “ambivalent structure in psychology” theory, the characteristic of which is the reciprocal elements of conformity and nonconformity.

流行現象は一般に社会科学の分野においては、その特性から広義の集合行動の中に含まれる。緊急時や突発時のパニックや暴動、熱狂的ブームといった既成の社会制度の秩序や規範から逸脱した行動は、集合行動と呼ばれ、「制度的秩序の概念に容易にあてはまらない種々雑多な現象を入れる合切袋である<sup>1)</sup>」と定義される。集合行動の概念は1920年代のシカゴ学派社会学により構築されたものであるが、これは群集行動、未組織の大衆運動、組織的な社会運動なども包含する上位概念でもあり、何らかの形で社会変動志向的な要素をもつものとされる。そし

て共通な特性として持続期間の短い、制度化されていない集団行動であるとも言えよう。このような集合行動の枠組みの中で流行現象を捉える際の起点として、ターナーの集合行動の類型が有効な手がかりを与えてくれる。

## 感染説と流行論

ターナー<sup>2)</sup>は、それまでに発表されたさまざまな集合行動理論を整理して自ら体系化を行った。特に彼の注目した視点は、集合行動発生時の人々の意識とメカニズムについての関係である。ターナーによると、集合行動は大きく3つに分けられる。すなわち感染説、収斂説、規範創出説である。

まず第一に感染説であるが、これは集合的感染を生み出す心理的基盤について述べた従来からの感染説の研究成果をまとめたものである。例えば群集心理の祖と呼ばれるル・ボン以来の「被暗示性と感染」あるいはタルドの「模倣説」、キャントリルの「批判力の喪失」、フロイトの「リーダーに対する同一視<sup>3)</sup>」などが、代表的なものとしてあげられる。これらの考え方の共通点は、異質な人々から構成される集団の相互作用に注目していることである。すなわち異質性を前提とした集団の中で、相互に感染することによって、人々が同質的で一様な集合に向かうとする考え方である。流行理論との関係で言えば、古典的な流行理論の代表とでも言うべきタルドの模倣説が含まれている点が注目される。本来は模倣という能動的な行為を、受け身的と見なされがちな感染行為と同一ディメンションで捉えている点が興味深い。また後述するように、同時期のル・ボンも同じカテゴリーの中に入っていることも、タルドとの関係において見逃せない重要な点である。

収斂説は社会科学の様々な分野に用いられる概念だが、そもそもは類似化を伴う生物進化の過程を収斂進化と呼び、生物学の領域で用いられたものである。この概念が転じて、例えば産業化の進展における経済体制、政治体制、その他の領域における近似化の仮説などが収斂理論と呼ばれる。類似の行動特性をもつ集合行動参加者にみられる斉一化現象にも用いられる概念である。ターナーも基本的にはこの考え方を継承しており、ここでの収斂説は群集のもつ本来的同質性に注目する。この説は、緊急事態での怒りや悲しみや一連の共通した感情や行動は、あらかじめ共有されている心理的特性が一段と強化されて表出したものとする。この説の代表格に、アメリカの社会心理学者オールポートの社会的促進説<sup>4)</sup>がある。同質性の高い集団においては、感染の速度も速く、いわば可燃性の素材と火との関係に例示されよう。すなわち概念自体に感染というタームこそ使用されていないが、母体となる集団が同質性あるいは異質性のいずれが高いか否かの相違であり、特定の行動や感情の伝播や感染といった過程自体は同じと捉えていることがわかる。

衣服の流行現象のような特定のオピニオンリーダーが先行する特異な集合行動では、流行に対する感性の高い集団、いわば同質性の強い集団内での伝播であり、その意味でこの考え方は一つの有効な視点を提供しうる。この他にも、特定の場に固有の規範が発生して、その規範の

ル・ボン、タルド、ジンメルにみる流行理論の系譜  
同調圧力が集合行動の原因とする規範創出説もあるが、感染説を主軸とした流行論へのアプローチには直接関連性がないのでここでは省きたい<sup>5)</sup>。

特定の集合行動の一つと目される流行現象を見る場合にいずれの視点が有効であるかは難しいところである。既述したように、古典的流行理論の代表とも言うべきタルドの模倣説は、能動的か受動的かの相違はあるものの基本的には感染説の枠組みの中で捉えられている。模倣の概念が感染のそれと表裏一体のものとなされていることに注目したい。また不特定の人々の間に、急速に広がる広範囲な流行現象を考えた場合には異質な特性の構成員からなる場合が一般的である。その意味で、異質性から同質性へと向かうこの感染説の視点は、有力であろう。また逆に、若い同世代の女性に典型的に見られる衣服やファッション全般にわたる流行現象においては、そのような流行に感受性の高い構成員の同質性が前提となっており、その意味では同質性が一段と強化されるメカニズムである収斂説が有力となろう。流行現象においては、さまざまな形態があり、ターナーの感染説並びに収斂説ともにそれぞれ有効な概念枠となりうる。実際の集合行動においても、突発的な大災害時に見られるパニック行動は一気に人々に広がる場合も見られるし、またいつも人種差別を受けやすい人々の不当な逮捕といった事件では、人種差別の不満がつのり、暴動が起きる場合もある。前者は主として感染説で、後者は主として収斂説で説明ができよう。このように両概念は「相互に排他的な説明ではなく、両者のメカニズムが作用しうるのである」<sup>6)</sup>というのが、今日では妥当とされている。

## 集合行動と社会的感染説

流行現象という特異な集合行動を見る場合に、ターナーの類型とは異なる観点からの集合理論も参考となろう。ターナーの類型論では、小集団内での同質性の高低、及び小集団内の構成員の感染作用に限定して注目したのに対して、ピューとペリーは、環境——特定の特殊状況——と個人との相互作用あるいはその社会的機能に注目した点が特徴である。

彼らは従来からの集合行動の捉え方は、非合理的、暴力的、自然発生的な側面に力点を置いたステレオタイプであると批判した。そして例えば象徴的相互作用論から集合行動を論じたブルマーの社会的感染 (social contagion) を、「雰囲気、衝動、行動様式が比較的急速に意図されず、かつ非合理的な形で伝わること<sup>7)</sup>」と定義づけていることに対し、まるで感染説を自動的メカニズムとして存在しているかのように扱っている、と批判した上で、社会の通常の組織的行動と集合行動との間に、連続性と共通の構造的性があるとした。すなわち集合行動とは「人間の集団における比較的組織化されていない社会的相互作用のパターンを指している<sup>8)</sup>」のである。

特に彼らの説で特徴的なのは、このような社会的機能を提示したことと、集合行動は状況的ストレスが存在する条件下において発生しやすいと、指摘した点である。ただ、感染という概念が重要なものだと認めており<sup>9)</sup>、集団行動を考える際の重要な基本枠と見ているといえよう。この説では特殊な集合行動が出現する前に、先有的に状況的ストレスが存在しているとさ

れる。ピューとペリーらの唱える社会的感染説は、先行研究の短所を見きわめた上で、社会的感染が状況的ストレスと関連をもっていると唱えた。その例として、中世ヨーロッパで起こったいわゆる舞踏病や、アメリカ南部の繊維工場で多発した「6月の甲虫事件」などをあげて、社会的相互作用のパターンによってそれらが引き起こされた状況を説明する<sup>10)</sup>。ところで、感染説には伝播を促進する環境要因が明確に説明できないとか、単に行動モデルが模倣される以外の基本事項は不明であるといった諸問題が残されたのだが、ピューとペリーは、ジンバルドの自我喪失の三段階説<sup>11)</sup>を用いて、この曖昧な概念のメカニズムを解明しようとした。

ターナーの類型では、小集団の基本的特性に注目しながら、感染の過程に注目したものが、ピューとペリーの理論では、さらに周りの環境との社会的相互作用に注目した社会的感染の観念を提示した点が対照的でありその特徴でもある。従来からの感染説がとかく一方的で、感染した個人にのみ関心を注いでいたのに対して、彼らは環境——特定の特殊状況——と個人との相互作用に力点を置いた。特に社会的ストレスという要因を仮定して、新たな感染説を展開したといえよう。

今日の流行現象のような集合行動を考える場合には、ピューとペリーによって展開された社会的感染の考え方が、より一段と適合される環境にあらう。近年の社会的感染説では、従来の説ではほとんど展開されなかったマス・メディアの視点が導入されるようになってきている。米国の社会心理学者であるフィリップスらは、近年のマスメディアの報道が、視聴者に引き起こす同調化作用に注目している。例えば新聞やテレビの自殺報道の比率が高ければ高いほど、多くの自殺が連動して引き起こされる事例を報告している<sup>12)</sup>。また1992年のロサンゼルス地区の暴動においても、テレビによって不当な人種差別を思わせるシーンが繰り返し報道されたことにより、特定の人種の間で大規模な暴動が起こった事例もある。わが国でも、特定の特殊な事件が連日集中的に報道されることにより、類似した模倣犯が出現するケースがよく見られる。メディア強力効果説が再び唱えられて久しいが、流行現象に目を転じて、ヒット曲や特定の象徴的なファッションの拡がりやテレビや雑誌との相関関係はさらに言うまでもなからう。

### ル・ボンとタルドの社会集団の捉え方

ターナーの集合行動の類型の中で、感染説の代表者として取り上げられたル・ボンとタルド。従来の研究では、群集心理の祖としてとかく扱われがちなるル・ボンと、かたや近代流行理論の先駆者としての位置づけのタルドであるが、より広義な集合行動の中の流行現象を対象とした場合に、両者に共通点が少なくないのがわかる。

ル・ボンとタルドは共にフランスで同時代を過ごした研究者で、関心領域も重なるところが大きい。両者共に、革新と変動の19世紀末の「群集の時代」の人々が対象である。すなわち当時台頭してきたヨーロッパの労働運動や大衆運動への不安や恐怖に根ざした集合行動論であった。19世紀以降の資本主義の発展に伴って登場してきた個人主義的デモクラシーから大衆デモクラシーへの過程で出現するのが、群集、公衆、大衆といった集合行動の類型論である。流行

論を前提としてル・ボンとタルド両者の関係を見るためには、この類型論を対照することがまず必要であろう。

ル・ボンはその著「群衆の心理<sup>13)</sup>」において、初めて“群集”の概念を打ち立てた。ル・ボンは群集のもつ非合理性とその圧倒的な力に、その時代の社会集団の特徴を捉えた。さらに彼の見る群集は、19世紀の階級社会の中でのペシミスティックでマイナスなイメージで描かれている。というのも、彼が属するブルジョア階級から見れば、激増し都市を席卷しつつあった労働者階級はじつに不気味な存在として捉えられたからであろう。すなわち群集とは、衝動性、無批判性、偏狭性、激昂性、盲従性といったきわめてネガティブ<sup>14)</sup>な存在として、考えた。そこには革命や社会運動といった当時の大規模な集合行動にとどまらず、社会不安、暴動、パニックといったより不安定な集合行動を引き起こす〈群集〉がいる。ル・ボンは〈群集〉を「(群集のある種の行為は) その行為自体を見れば確かに犯罪的である<sup>15)</sup>」とまで見なした。

一般に群集とは一時的に集合して、やがて散っていく人々であるが、その群集のおかれている社会から承認されている日常性や行動規範から逸脱した時に発生するものであり、それらの規範の放棄の度合いが強くなって、非日常性が高まれば高まる程、ル・ボンのいう群集心理は強まるのである。そしてこのような通常の役割期待から解き放たれた人々は、匿名性をもつことにより、責任の所在も拡散して、付和雷同しやすく影響を受けやすい状況となり、あたかも空気飛沫感染のように他者の思想や感情などに容易に感染するものとみなされる<sup>16)</sup>。一般にル・ボンの感染説は、人々が群を成して集まっている近接性の高い中で起きるさまざまな感情や行動の伝播に焦点が当てられ、群集の中であって、感情も観念も暗示や感染によってみな同一方向へなびくと考えている。その意味では、社会経済的に成熟した現代社会の人々を対象とした「社会現象としての流行」との相違点は大いにある。しかしながら貴族的なエリート主義の視点や、生物学的な単純な感染反応とでも言うべき感染説などの問題点はあるとはいえ、群集という集団の行動の中で、ある感情や観念といった目に見えないモノやコトが、人から人へと伝播していく感染過程にいち早く注目したル・ボンの着眼は、同じように未組織で一時的かつ集合的な行動である現代人の流行現象を説明するのに有効な側面はある。

ル・ボンの「群衆の心理」(1986年)が刊行されてから6年後の1901年にタルドの「世論と群衆」が出される。タルドはル・ボンの言う“群集”に対して、それとは対照的な“公衆”概念を打ち立てた。ル・ボンの捉えた群集が肉体の接触が可能となる近接状態での密集した集団であるのに対して、タルドのそれは分散して存在して、印刷メディアを媒介として間接的に接触している集団をさす。この公衆概念では接触なき伝染が特徴となる。これは当時台頭してきた大量伝達の印刷物——新聞や政治的リーフレット、雑誌など——を媒介として、純粹に観念的な暗示の「接触なき伝染」が、人々に伝染するとタルドは考えた。そして、それらの人々を公衆と呼んだのである<sup>17)</sup>。群集が同一地域に集合して、非日常的で非合理的な判断をするのに対して、公衆は拡散して存在し、日常的な生活空間の中で合理的な判断を行うとされる。そして、ル・ボンが群集をネガティブにマイナスイメージで捉えたのに対して、タルドは、印刷メディアを媒介とする情報の交換を通じた間接的接触によって、合理的判断を下すプラスイメー

ジの理性的存在と捉えている点の特徴である。

メディアの存在を集合行動の中にいち早く取り入れたタルドの観点は、今日的なメディアを介在とした社会的感染にも通じるものである。しかしながらこのような着眼は、実はル・ボンにも見られるものである。彼も、遠くに離れていても、間接原因によって人々の心に感染の下地ができる場合もあると言い、人々は必ずしも一つの場所に同時に存在することを必要としないと指摘している<sup>18)</sup>。また、新聞雑誌の類が相反する意見を暗示によって広める、とも述べている。従って先行した「群集」概念の中に、既に続く「公衆」概念の萌芽があったともいえよう。ただル・ボンの場合は、これらの活字メディアを単に世論を反映する鏡程度と見ており、タルドのような群集の根幹をなす要因とは捉えず、主眼は小集団内の構成員の心理の伝播のメカニズムに向けられており、タルドのようにメディアの能動的な働きかけやその効果について重視しなかった。

メディア社会到来以前に、公衆の概念を通して「接触なき感染」として流行とメディアとの緊密な関係を示唆したタルドの予見は、マスメディア社会となった今日において現実のものとなっており、流行研究におけるその視点の有効性は未だに大きい。

### 感染説と模倣説

流行理論という観点から両者の社会集団内の情報や感情や信念などの伝播や影響の捉え方を見てみると、直接的な接触の下で感染が生じるとするル・ボンの医学的感染の立場に対して、タルドにおいてはメディアを介在とした間接的な伝染によって生じるとする立場である。感染と伝染という表現の違いはあれ<sup>19)</sup>、基本的には異質性を前提とした社会集団内での感染という考え方であり、その意味においてターナーの感染説で包含される概念であることがわかる。

流行現象の近代的研究の第一歩であるとされるタルドの「模倣の法則」は、1890年に公刊されているが、ル・ボンとの関係で見えてみるならば、既にその9年前に「人と社会」(1881年)の著作の中で、ル・ボンは次のように述べている。「人間は動物と同じく本来模倣性に富んでいる。～流行の影響力が生まれるのも、この要求からである。～あるいは単に服装に関することにせよ、幾ばくの人が、あえて流行の力をまぬかれようとするか?～」と。そしてここにル・ボンが、流行現象の基本として「模倣」という要因が存在していることを明記している。そしてこの事実を踏まえた上で、「群衆の心理」(1895年)の中で、他の著者がこの部分からヒントを得た上で「模倣」の概念を構築したのではないかと批判した<sup>20)</sup>。いずれにしても、タルドがル・ボンから流行理論構築の一つのヒントを得ていたことは、否めないであろう。本論でル・ボンをあえて、タルド同様に流行理論の系譜の中で取り上げたかは、ターナーの分類による共通点の他に、まさにこの点にあるといえよう。

またタルドの主張する模倣説に対して、ル・ボンは「社会現象において多大の影響力があるとされている模倣というものも、実は感染の単なる結果にすぎないのである<sup>21)</sup>」と批判して、感染の結果として模倣が起きるという立場をとった。彼の最も重視するのは、最上位にある模倣ではなく、中間位にある感染である。感染を「単にある種の意味のみならず、ある種の感じ

ル・ボン、タルド、ジンメルにみる流行理論の系譜  
方をも、人々に強制できるほど強力である<sup>22)</sup>」と捉えた。ル・ボンは感染を群集心理の中心概念とみており、この点がまさに感染説の代表者とまで言われるゆえんである。

### ル・ボンの感染説

ル・ボンの群集心理論は、科学的正確さや客観性に欠ける面はあったが、現実密着型の観察を中心とした手法の生々しさや豊かな示唆によって注目を集めたのである<sup>23)</sup>。

本来は医学の概念である「感染」という考え方をなぜル・ボンは社会科学の中に導入したのであろうか。この視点からル・ボンの背景を見てみよう。彼はもともと医学を学び、1870年の普仏戦争の時は野戦病院に勤務した経験の持ち主だった。1876年には医学博士号を取得していたが医師にはならず、公衆衛生学、物理学、考古学、人類学、社会学、心理学等と実に精力的に幅広い学問分野を修め、医学のみならず社会科学の分野まで網羅する博学な研究者として活躍するようになった。いわゆる百科全書派的研究者となったわけである。

このように自然科学から社会科学にまたがる幅広い知識に精通していた彼が、当時注目されていた疫学の感染概念を他の科学に応用したとしても不思議はない。ル・ボンの『群衆の心理』が出版されたのは19世紀末の1895年のことであるが、その頃、すでに医師のジョン・スノーらによって記述疫学の分野は確立されていた。スノーは、19世紀半ばにイギリスで大流行したコレラやチフスなどの疫学調査を行っていた。その調査で伝染病が人々の間にどのように広がっていったかを明らかにし、具体的な伝播様式を突きとめたのであった。今日ほど科学的に伝染症（感染病）のメカニズムが発見されていたわけではないが、ちょうど伝染病が具体的な媒介物（細菌などの微生物、小動物等）によって伝播していく過程が次々と明らかになっていった時代である。このような時代にル・ボンの感染説は生まれた。人から人へ病原体が伝播していく〈伝染〉の過程に彼は注目し、そのコンセプトを社会心理学の分野に応用したのである。ル・ボンは「群衆の思想、感情、感動、信念などは、細菌のそれにもひとしい激烈な感染力を具えている<sup>24)</sup>」と述べている。

ル・ボンの関心はもともと群集行動のメカニズムを解明することにあつた。当時主流であったデュルケムらの生物有機体説などの影響を受け、あたかも群集が一つの大きな生物であるかのように見なしたのである。産業革命によってヨーロッパの列国が隆盛をきわめていた当時、群集とは、独立した一個の精神的統一体であり、社会は群集の密集として性格づけられる、しかるに社会は集会的な心理を形成している。そう彼は捉えたのである。

ル・ボンのいう感染説とは、小集団内の行動のメカニズムを考える際の、構成員の心理特性の特徴として取り入れた。日常の社会的規範から解き放たれた人々の心理特性として、ル・ボンは次のような特徴をあげた。群集は基本的には匿名的であり、それゆえに無責任となり情操が完全に消えてしまうと指摘。日常的な家族や職場といった社会集団や近隣集団とは異なる第三の空間に群がる人々の相互に私秘的な状況である。そしてこのような無責任で非日常的な空間では、「被暗示性」が高まると言う。これはもともとは精神分析学の概念であり、群集の中の

個人は通常の心理状態に比べ一段と暗示を受けやすい状態にあることを指す。そしてこれら匿名性や被暗示性と密接な関係にあるのが「感染」の概念である。群集の中ではあらゆる情操や行為が感染しやすく、個人は自己というよりは集合的利害のために動くのみなしている。ル・ボンの感染説は、暗示→感染→模倣の三重構造になっており、感染そのものは中間に位置している。そして感染とは暗示を受けやすい性質の結果であると考えた。つまり被暗示性が群集のもつ性質の基本要素とされているのである。

ル・ボンはまた、群集には「意識的人格が消滅して無意識的人格が優勢になる、暗示と感染によって感情や観念が同一方向へ転換させられる、暗示された観念がただちに行為に移される傾向<sup>25)</sup>」が出現すると唱えた。集合心のような人々の精神的統一の法則にしたがって、群集が登場するとみなされた。またル・ボンは「意識的な個性が消え失せて、あらゆる個人の感情や観念が、同一の方向に向けられる<sup>26)</sup>」とも述べている。彼の感染説は、社会的・心理的に異質な人々の同質化とその際の相互作用に注目しているところにその特徴がある。いわば異質なものから、感染や暗示を通して同質化へ向かうという発想である。

しかしながら、ル・ボンの感染説は、感染が成立する条件や具体的媒介変数などの実証性のある客観的要素についてはほとんど説明がなく、あたかも動物の間に伝染病が一気に流布するのと同じレベルで群集の集合行動を見ている様は、単純感染説とでもいうべき簡単な図式である。

## タルドの模倣説と社会観

模倣とは個人レベルでは、他者の行動や特性を観察することによって、類似した行動パターンや特性を習得することを意味するが、社会レベルでは社会関係を成立させる結合性あるいは同調性を可能にする機能を営むものとされる。今から一世紀前に出されたタルドの「模倣の法則」(1890年)は、主として後者の社会レベルに主眼を置いたものである。

タルドは、もともとは司法職に携わる犯罪学者として出発した。同時期のシゲーレらの群集心理あるいは犯罪研究家たちが従来からの遺伝的、先天的要因を重視する立場に対して、彼の関心は社会現象としての犯罪にあったので、その後天性、社会性に注目する立場をとった。そこに彼の説の特徴がある。これはル・ボンが、同じようにシゲーレらに影響受けながらも、個人レベルの模倣に至る感染のメカニズムに関心をよせたのとは対照的な方向である。タルドは社会的事実の基本に模倣をおいた。すなわち社会変動の基本的要因として、反復、対立、順応の三つの普遍的過程をあげている。対立は反復と順応を媒介するに過ぎず、また順応は反復が新たな周期に入ったことを示すものであり、あくまで反復が中心であるという。この反復の主要な形式は、波動、遺伝、模倣の形で現れる。その中でも注目されるのは、反復が社会現象の中で、模倣という形態をとることである。模倣は彼の社会観の中核といえるものである。社会とは何かという問いに対して、タルドは「社会は即ち模倣であり、模倣はこれ即ち一種の夢中遊行病である<sup>27)</sup>」と述べ、模倣説を展開する<sup>28)</sup>。

タルドの模倣説をル・ボンと比較すると、「暗示」の概念を用いている点が共通している。



つまりタルド説には、〈暗示—模倣〉の原理が内包されているのである。これは当時新たな学問分野として注目を浴びていた催眠研究から<sup>29)</sup>、人々の心理的相互作用に関心が向けられ、暗示の概念が明示された時代性とも関係あろう。ル・ボンは既述したように、暗示から感染そして模倣へと三重構造になっており、中心概念はあくまで「感染」であり、感染の結果としての模倣という位置づけにすぎない。しかしながらタルド説では、社会結合の原理を模倣に求めていることからわかるように、社会変動の重要な要因として捉えられている。またタルドの模倣説の概念枠は、必ずしも彼のオリジナリティではなく、すでに同時期のバジヨット、ローマンズ、クールノらの先行研究があった。しかしながら、「模倣はたんに一つの位置ではなく、絶対的な位置を占めていた<sup>30)</sup>」というところに、特徴がある。模倣という概念を中心に据えて、あらゆる現象を解き明かそうとしたわけである。つまり社会的事実の基本に模倣をおいたわけである。

### 模倣説と流行概念

タルドの模倣説は、論理的諸法則と超論理的諸法則とに大きく分かれる。前者は「模倣対発明」の中で考えられるさまざまな変動についての法則といえよう。後者の超論理的法則は、さらに三つに分かれる。個人レベル（1番目の法則）から集団——特に社会階級——のレベル（2番目の法則）、そしてさらに社会レベル（3番目）に応じた模倣概念が提示される。1番目の法則は、「内部より外部への模倣」である。これは個人レベルでの模倣プロセスである。続く2番目の法則はさらに2つに分かれて、その第一は、「劣等者による優等者の模倣」である、これは身分社会の優劣を前提とした概念である。そしてその第二の「模倣は上層より下層に移る」とした法則と必然的につながってくる。これがタルドの流行概念の中心と言われるトリクルダウン説（滴下効果：trickle down effect）と呼ばれるもので、裕福で恵まれた階級のファッションなどが、より階層の低い層に模倣されるという「縦の流れ」を表す。このトリクルダウン説は、タルドの流行論の中で現在でもよく引き合いに出される法則である。より広範なパスベクティブの3番目は社会全体のレベルを表し、「慣習の時代から流行の時代へ」という命題となっている。長い間のしきたりなどの慣習が社会規範となっていた固定的な時代から、めまぐるしく変わる流行が規範となる流動的な時代へと移行していく。流行現象を慣習との対置の関係において捉えた点に特徴がある。このようにタルドの模倣説は、個人レベルから、集団レベル、社会レベルへと一連のつながりをもって展開する。

このタルドにおける流行概念は、漠然と示されている個人レベルの模倣に対して、集団レベルにおいて初めて、より具体的に模倣の対象となるコンセプトの流れを示した点が大きな特徴である。さらに近代に入ってから社会全体の流れが、基本的には流行現象を社会変動の重要で根本的な要素として捉えた「流行の社会へ」の流れを予告しえた点も、今日的観点から見て評価される点であろう。ル・ボンと同様に「模倣」という概念を使用している共通点がありながら、タルドはこの概念を個人や小集団レベルのみならず、より次元の高い社会全体にまで拡張して応用しており、その意味で必然的に社会と個人との相互作用に力点が置かれている。

## ジンメルの流行理論

流行を集合行動と捉える社会的あるいは社会心理学的視点からのアプローチの最も一般的な方法は、その機能に関するものであろう。すなわち流行現象という社会現象が、大は社会レベルから集団レベル、そして小は集団レベルの中でどのような機能をもっているかが対象となるわけである。この流行現象に対する機能論的アプローチで論議を展開しているのが、G. ジンメルであり、1911年に発表した論文「流行」にその概念が述べられている。彼は基本的にはドイツの社会的心理学思想の流れをくみ、従来からの総合社会学に対して〈社会化の形式〉を主な対象とした形式社会学の立場から、また哲学においては、新カント派の影響を受け「生の哲学」の立場から、現代社会のさまざまな側面を考察した。流行現象の機能に関して最も充実した議論を展開しているといわれる<sup>31)</sup> 流行論も、このような多方面にわたる彼の関心と視野の中で捉えられたもので、この論文もまた、ジンメルの〈文化の哲学〉という広範なテーマの中に位置づけられる小論である。

## 両価説：同調化と差異化

人々が流行に引きつけられるのはなぜか？ ジンメルはこのような問いかけに対して、流行に参加している人々は、周囲の人々への同調性を求める欲求とそれらの他者との差異化や個別化を求める相反する欲求を同時に持ちあわせているからだと言った。いわゆる両価説である。簡単にいえば、他者への同調と非同調の欲求が同時に存在し、かつ満足させられるというわけである。流行採用者は自分も周りの人々と同じ行動をとっていることに安心感をもち、かつ新しく一般に普及していないという事実によって、自分は何か特殊で新しい何かを体現しているという満足感をもつことになる。そのような強い同調性の中でも自分らしさを保ち表現しようとする巧みな心理を、ジンメルは描きだしたのである。

流行を生み出す二つの対立関係の欲求とは、模倣や同調化の反作用とでもいえる差異化の欲求をさす。これは分化、変化、逸脱といったさまざまな表現で提示される非同調化の欲求である。他人に同調して同じような服装をしたい心理は、流行のもつ社会的均等化の働きによって、人々に平均化や共通化を求める。しかし、個性化の余地を残すことによって、まったく他人と同一である模倣は避けられる。これは、自分らしさの表現、自我実現の欲求と呼べるものである。

このような流行における二律背反的な考え方は、ジンメルの生の哲学全体に貫かれるモチーフとなっている。たとえば生物学における遺伝論が、まさに普遍的（遺伝）なもの多様性（変異）とを包含するように、彼は多くの分野の生の諸現象に二元論的要素が存在すると論じ、それらの弁証法的統一をはかることによって、その総体が明らかにされると考えた。二元論は、人間の生を普遍化と個別化の両ベクトルで捉えられるとしたのである。

ジンメルの概念でキーワードとなる「同調」とは、行動、態度、判断などを集団や他者の期

待する方向に変化させることをいうが、同調の概念の中にも内心から従った「私的受容」、内心は不一致ながら外面だけは一致する「追従」や「応諾」などがある。この他にも集団内部の意見の一致度や集団自体の大きさや構成要因といった集団側の状況も規定要因として考察されなければならないなど、同調を規定する要因は数多い。ジンメル論の同調は、これらの分類の中では、追従や応諾などの同調性に近い。なぜならジンメル説では同調性と非同調性の相対立するベクトルの共存という形式での概念であり、あくまで同調性を基盤とした中での自己実現や本音である「非同調性」という位置づけとなっている。

言い換えるならこの本音の部分は、全体としては周囲の流れや圧力に合わせてながら（同調しながらも）、内心に一致する非同調性の部分として存在するわけである。

このような意味において、ジンメルの言う同調性とは、タルド説の「模倣」の概念に近い。他者の行動や特性を見たり観察することによって、類似した行動や特性あるいは思考などを習得することが模倣と見なされるが、同調がそれを変化させるように働く影響力や圧力などを伴うのに対して、模倣自体はモデリングに象徴されるように認知過程や学習過程の中で捉えられるものであり、必ずしも一致する概念ではない。

しかるにジンメル説では、限りなく模倣の概念に近い同調概念として位置づけられているのが特徴とも言えよう。すなわちここでは流行参加者の心理と一致か不一致かという視点は考慮されず、周囲に合わせた行動のみに力点が置かれており、いわば模倣型の同調とでも言うべき形となっている。「流行とは与えられた範例の模倣である」と自ら述べている<sup>32)</sup>ように、流行の基本軸となる同調化という概念は、タルドのいう模倣とほぼ同じ概念である。そしてさらにタルドと大きく異なるのは、非同調的である差異化の概念を同時に提示した点にある。社会現象における普遍化の欲求はまさに慣習のような安定した規範をめざし、その多くは同調という形をとりやすい。これらは、模倣への心理的傾向によって支えられていることが多い。そしてこの心理的傾向と対立関係にあるものが、他の二元論同様、個別化のベクトルということになる。このようにジンメルは、他人との同調性という概念でタルドの基本枠を継承しつつ、さらに一歩進めて、流行を双方向性をもつ相反するベクトルの自在な現象として捉えたのである。流行現象が相入れない要素を同時に内包しながら、弁証法的に展開していくメカニズムが、ここに初めて提示されたのである<sup>33)</sup>。

しかしながら、このようなジンメルの両価性の考え方は、その反作用的な二重の複雑な心理構造の存在が漠然と述べられているだけで、作用と反作用の相関や位置関係についてはあいまいである。たとえば両価説ということばから示唆されるように、逆のベクトルである両作用が、同じようなレベルで共存するのか否かといった問題等については明らかにされていない。実際の流行採用時には、多くの人々が模倣の対象となるシンボルをほぼそのまま採用して再現する場合が一般的なのである。周りに同じようなシンボル採用者が増えてきて、支配的になった段階で、新たな進化形や個性的な変化形が生じてくるのがよく見られる。ジンメルの両価性の考えは、たとえばこのような時系列の中で変化していく両作用の相関関係については考慮されず、あくまで大まかな概念枠を提示しているにとどまっている。とはいえ、ジンメルの考え方は未整備ながらも、個人内の心理レベルでの二重の同調作用の動きに注目したことで、流行心理

明への大きな糸口を提供してくれよう。

### 滴下効果とジンメル

ジンメルは「流行は常に階級的である<sup>34)</sup>」といい、上流階級の生活様式やファッションが、同階級の人々を結合させ、他の階級と区別されるアイデンティティを与えるものであると考えた。いわば流行における水準化現象である。階級社会では、頂点に位置する上流階級の生活様式やファッションが中産階級や下層階級の憧れの対象であった。階級のより低い層が上流階級をモデルに、模倣し接近することによって、こんどはだんだんと上流階級のアイデンティティが失われる事態が発生する。その結果、上流階級は、さらに新たな象徴を求めたり採用する。いつしかこんなサイクルのパターンが出現するようになった。すなわち「下では模倣の追求が、上では新奇なものへの逃避が激しくなる<sup>35)</sup>」。ここに流行が寿命をもち、一種の社会変動となって推移する視点が芽生えている。タルドの模倣説と同様に、ジンメルのトリクルダウン説も基本的には上から下への新奇なイノベーションの流れにそった同じパターン構造をもっている。その意味で、ジンメルの両価論の同調性の概念は、下層階級が上流階級のさまざまな型を模倣するという意味で使用されていると考えられる。

タルドの説と違い、ジンメルのトリクルダウン説の特徴は、下層階級が上流階級の型を模倣する過程において経済システムが関わっていることを明確に指摘した点である。ジンメルは下から上への模倣について、「貨幣経済の浸透は必然的にこの過程を著しく促進しかつ顕著にする<sup>36)</sup>」と述べて、さらに「とりわけ下層階級の経済的上昇運動は、それが大都市でとるテンポの中で、流行の急速な交替に有利に作用せずにおかない<sup>37)</sup>」と指摘する。近代資本主義の経済システムの浸透が、上から下への滴下効果の速度を早め、その結果流行現象の速度も一段と速めていると考察している。これは今日のような意図的流行現象の発生と商業化システムとの結合に通じる視点であり、その意味で流行現象の大きな柱とでもいべきトリクルダウン説の中に、経済的要因の重要性を指摘した意義は大きい。

### 古典理論の流れ

古典理論で展開された流行の基本的な枠組みは、他者からの感染、他者への模倣というものであった。これらは大まかに見ると、流行情報発信源である他者に対する〈同調性〉という枠組に含まれるものである。たとえば「はやりの服を着てみたい」心理は、周りの人々と同じような服にしたいという一種の同調作用と見られる。同調作用の最も典型的なパターンである模倣は、流行発信源からの情報をそのまま受け入れて再現することである。

群集心理という不定形な群集行動に初めて光を当てたル・ボンは、生物学的あるいは医学的な枠組を採用し、人々が意思のない生物であるかのように、受け身の存在とした。群集心理を、情報源から受け手への一方向のベクトルが働く作用と考えたのである。

ル・ボンが漠然と提示した暗示——感染——模倣という三重構造の中で、〈模倣〉という概

念をタルドはより明確なものとし、それを流行現象の主要なメカニズムとして提示したのである。彼は、社会のさまざま分野に見られる模倣を、個人レベルでは、個人の内部から外部へと向かうベクトルであると考えた。ル・ボンの群集心理における感染説が外部から人の内部へ向かうのに対して、逆の位相を構想した。流行を採用する個人一人ひとりの主体性あるいは意思に注目し、能動的なメカニズムとして模倣の心理を重視したのである。このようなタルドの模倣説の考え方は、明治初期のわが国の流行研究にも大きな影響を及ぼしたのである<sup>38)</sup>。

ジンメルは、ル・ボンやタルドの主張した模倣性を継承して個人一人ひとりの他者への同調性が流行の基本であるとしながらも、これとは逆のベクトルである非同調の欲求も重要であると主張した。ジンメルのいう非同調とは、変化、逸脱、分化といったような形で出現する同調性への反作用的行為のことである。「流行は社会的均等化への傾向と、個性的差異と変化への傾向とを一つの統一的な行為の中で合流させる<sup>39)</sup>」と彼は捉える。たとえば、女性がなぜ流行に熱心であるかを、「一様化の衝動と個別化の衝動、模倣の魅力と顕彰の魅力とを同時に表現し強調する<sup>40)</sup>」ゆえであると論じる。そしてこのような相矛盾する心理が人の心に同時に存在するとした。

両価説においては、情報発信源への同調とともに、非同調の作用も重視された。「流行の服を着てみたい」けれど全くの同一性を避けたり、「自分らしさも出したい」といった複雑な心理構造を捉えたモデルとして注目されるものである。これら流行研究の流れは、外界への単純な同調である模倣モデルから、より複雑な同調の二重構造モデルへの移行を表している。しかしながらこれらの相違にもかかわらず、基本的な枠組みとして集合行動内における感染説をあるいは感染の概念を下部構造とした模倣説が、重要なモチーフとして流れていることに注目したい。

## 註

- 1) Gerth, Hans Heinrich & Mills, Charles Wright, 1953 Character and Social Structure The Psychology of Social Institutions Harcourt, Brace & World, Inc〔古城利明 杉森創吉訳 1970『性格と社会構造』青木書店 p458〕
- 2) ブルーマーの影響を受けながら、象徴的相互作用の立場から集合行動論を唱えた。本論との関係においては、感染説を集合行動の一つの重要な柱と捉えて、類型論を論じた点にある。ターナー説は、従来からの感染説をよりモディファイした概念の規範創出説を新たに打ち出した点が、現代的な集合行動論から見た場合の特徴とされている。
- 3) 同一視とは、もともとは精神分析学の術語である。これは人々が対象（この場合は集団のリーダー）の外観や特性を自分の中に取り入れて、対象の行動を模倣したり暗示を受けたりして自己の価値を増大する働きのことである。特に情緒的な結合が特徴とされる。人気のあるタレントや歌手などと熱烈なファンとの関係などを考えるのにも有効な説である。人気歌手の周りを取り巻き感情を一体化しているファンに、情緒的感染(Emotional Contagion)とかミリング(Miling: 興奮状態で無目的に他者の周りを動き回る)のような集団行動が生じると考えられている。
- 4) F. H. Allportの唱えた説で、人が傍らにいたり人から見られていると、仕事の作業能率が向上する現象をさす。ただし共行為場面などでは、作業行為の内容によっては逆に社会的抑制の現象が見られる場合もある。
- 5) この説では、集団行動が促進あるいは抑制されるのは、感染とか収斂といった個人に還元できる

- 心理的作用ではなく、ある特定の状況の中でそれにふさわしい社会規範が創出されるため、それによって特定の状況に応じた規範が形成されると、それに適した特定の行為が成員間に容認されていると認知するベクトルが働く、とする。いわば感情要素に対して、認知的要素のレベルで考えている。つまり、この説は、通常の社会的行動と、そこでのルールや価値が逸脱しているとされる集合行動に、連続性のある一体感をもたせたのである。
- 6) 竹内郁郎 1973 集合行動と社会変革はどのように関連するか松原治郎／竹内郁郎（編）新しい社会学－社会学の現代的課題－（有斐閣選書）有斐閣 p188
  - 7) J.B.Perry,Jr and M.D.Pugh,1978 Collective Behaviour:Response to Social Stress West Publishing Co., [三上俊治訳 1983 『集合行動論』 東京創元社 p88]
  - 8) J.B.Perry,Jr and M.D.Pugh 前掲訳書 pp13-14
  - 9) J.B.Perry,Jr and M.D.Pugh 前掲訳書 p88
  - 10) 舞踏病 (dancing mania): 中世ヨーロッパで起こった大衆的ヒステリー状況で、大規模なものは 500 人から 1000 人くらいが興奮して踊り出す群集行動。6月の甲虫事件: 1960年代にアメリカ南部地方の繊維工場で報告されたもの。悪性の甲虫に噛まれて被害を受け体調をくずした女性従業員が多発するが、実際には甲虫は存在しなかったとされる事件。
  - 11) これは群衆に対する社会的インプット ——一定の社会的密度、騒音とか興奮など——、群衆の中の個人一人ひとりの主観的状态 ——匿名性、自我意識の低下、社会的責任の低下など——、そして最終的なアウトプットである行為 ——自我喪失的な行動—— の各段階をさす。それぞれの段階で感染説の特質が生かされている。
  - 12) D.P.Phillips, 1986 Natural Experiment on the Effects of Mass Media, Advances in Experimental Psychology を参照
  - 13) 本論で用いられているル・ボンの著作である「群衆の心理」の「群衆」の表記は、現在では「群集」の方が一般的となっているので、ル・ボンの著作名以外は原則として通常の慣例に従って表記した。
  - 14) 福武直他（編）1958 社会学辞典 有斐閣 p949 “ル・ボン”
  - 15) Gustave Le Bon, 1910, Psychologie des Foules, Felix Alcan Editeur, 15edition [櫻井成夫訳 1993 『群衆の心理』 講談社 p26]
  - 16) Gustave Le Bon 前掲訳書 p208
  - 17) ル・ボンはその著『群衆の心理』の註の中で、「読者にはタルド氏の諸研究をすすめる」と書きながらも、自身の群集に対する見方は正反対であると述べている。参照: Gustave Le Bon 前掲訳書 p23の註積より
  - 18) Gustave Le Bon 前掲訳書 p162
  - 19) 正確には、伝染は感染とは異なる。伝播接触してから、体内で病原体が増殖する過程までを対象にしたのが感染で、もっと狭い意味での「伝播する過程」に限定したのが、伝染である。したがって本来なら「伝染説」とでもいうべきところなのであるが、現在は感染 (infection) という表現が伝染の意味をも包含して使用される慣例にしたがって、本論でも〈感染〉と〈伝染〉ともに、感染という表現で統一して、論を進める。ただし翻訳では「感染」と訳されているが、フランス語の原典では“contagion” また英語訳でも“contagion” が使用されていることからわかるように、もともとは特定の行為や思考などが人から人へと伝播する過程を重視した「伝染」のニュアンスで使用されていた点に留意したい。
  - 20) Gustave Le Bon 前掲訳書 p163
  - 21) Gustave Le Bon 前掲訳書 pp162～163
  - 22) Gustave Le Bon 前掲訳書 p64
  - 23) F.B.Karppf,1932 American Social Psychology:Its Origins, Development, and European Background New York, Russell & Russell [大橋英寿監訳 1987 『社会心理学の源流と展開』 草

- 書房 p155]
- 24) Gustave Le Bon 前掲訳書 p162
- 25) Gustave Le Bon 前掲訳書 p158
- 26) Gustave Le Bon 前掲訳書 p26
- 27) Gabriel tarde, 1907 Les lois de l'imitation, etude sociologique, 5me edition Paris [風見八十二 訳 1924 『模倣の法則』 而立社 p169]
- 28) 模倣と対を成す発明という概念も重要である。これはつまりは模倣は一様性と対をなす発明は変異性と対をなす。そして模倣も発明も社会のある側面を表しているのである。つまり社会現象というものが模倣が発明である, というのである。そして, 発明はオリジナルな新しいものであり, 模倣は伝統や慣習に連なるものである。この両者の相互作用によって社会変動が起きることもあると考えられるのである。
- 29) タルドの暗示 —— 模倣説と, ル・ボンの暗示—— 感染説の共通項となっている「暗示」は, 当時盛んに研究されて一躍注目を浴びた催眠研究からの影響が大きい。タルド自ら「この時代遅れの言葉(夢中遊行症)は, ~まだ催眠という言葉に置きかわっていなかった」と述べていることから, “催眠”研究が当時, 最先端の科学であったことがわかる。引用: Gabriel Tarde 前掲訳書 p148
- 30) Karpf, F. B 前掲訳書 p110
- 31) 牧園清子 1978 「流行への社会学的接近」牧園清子(編)『流行』現代のエスプリ No.171 至文堂 p6
- 32) Georg Simmel, 1911, Philosophische Kultur gesammelte Essais [円子修平・大久保健治訳 1967 『文化の哲学(ジンメル著作集七)』], 白水社 p110
- 33) 同調性(周りの人々と同じような身づくろいをしたい)と, 非同調性の部分である差異化あるいは個性化(皆とは違う自分らしさを演出したい)という二方向のベクトルは, まったく対立あるいは矛盾する心理として存在している。ジンメル説の中核とでもいべきこのアンヴィバレンスの心理は, スイスの精神科医オイゲン・ブローラー(Paul Eugen Bleuler)によって命名されたものであるが, 個人の感情に潜む二重方向性を表すものである。現在では社会心理学や心理学全般に, 一般的な意味で日常レベルで使われている。二面価値と呼ばれるこの心理は, 相反する感情が並立する精神状態を示し, ある志向が同時にポジティブな感情とネガティブな感情とで強調される事実をさしている。他者とは違う特別な自分でありたい差異の心理と, 他者と同じでありたいとする心理が同時に存在するところに, 固定的でない流動的なダイナミズムが生まれるのである。このようなアンヴィバレンツな二重の心理構造は, 必ずしも実証的に論じられたものではなく, むしろジンメル特有の「生の哲学」全体を貫くモチーフから生まれたものであるが, 今日これほど引き合いに出され, 流行心理を巧みに説明する視点はあるまい。
- 34) Georg Simmel 前掲訳書 p34
- 35) Georg Simmel 前掲訳書 p37
- 36) Georg Simmel 同上書
- 37) Georg Simmel 前掲訳書 p57
- 38) タルドやジンメルの流行論の考え方は, トリクルダウン説, 両価説ともに, わが国の流行研究に大きな影響を及ぼしてきた。わが国における流行研究は, 欧米における流行研究の萌芽期とほぼ同時期に現れた「考現学」に, その源流を見ることができる。明治期における流行研究は, 最初は考現学ではなく, 〈風俗学〉というジャンルの中でその胎動がはじまる。これは明治維新後急速に洋風化していく文化事象を, 定点観察法などによって科学的視点を入れて考察しようとしたものである。変化する文化事象は大きく風俗学として捉えられ, その中に流行現象も含まれた。流行の学問的研究としては, 後に人類学者として活躍した早稲田大学の坪井正五郎によって著された『風俗漸化を計る計量法』(1887)という論文が, 学問的研究の出発点と目される。ここでいう風俗学は, 柳田国男の民俗学に相対するジャンルとして登場した。すなわち柳田の民俗学が, 慣習や社会制度

中島純一

のような規範を前提とした不変の文化事象を対象としているのに対して、風俗学は流行現象のような変化する文化事象を対象としている点が特徴である。やがてこの手法は今和次郎らに引き継がれて考現学（モデルロジー）として確立されていく。

坪井や今らの考現学は、流行理論に貢献するというよりも、定点観察法という研究あるいは調査の方法論のユニーク性が注目される。日本の流行研究の先駆けである風俗学からのアプローチは、フィールド調査を中心とした徹底した実態観察にその特徴があった。風俗学の対象は変動する文化事象であるが、それらはあまりに日常的で具象的なので、学問的対象とは見なされない傾向にあった。そのような風潮の中で、坪井や今らの試みは、流行という変化しつづける不定形で捉えどころのない社会現象に、果敢に科学のメスを入れたという点で大きく評価されよう。

39) Georg Simmel 前掲訳書 p34

40) Georg Simmel 前掲訳書 p47